

演 劇 は

社 会 の

処 方 箋

文化庁委託事業

令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業

やってみようプロジェクト



公益社団法人 Association of JAPANESE THEATRE COMPANIES

日本劇団協議会

# やってみよう プロジェクト

やってみようプロジェクトは、演劇ワークショップを通して周囲とつながりを持ち、生きづらさを感じることをない「共生社会の実現」を目指しています。

本プロジェクトは、芸術団体が行う演劇ワークショップの社会的価値を可視化し、その価値を共有することを目的にスタートしました。現代社会には、さまざまな理由から生きづらさを感じている多様な立場の人がいます。そのような人たちが排除されることをない社会を目指し、日本劇団協議会の正会員団体と全国各地域のNPO団体や行政・教育施設などと協働、「演劇は社会の処方箋」として地域・社会的課題解決を図る事業です。



## 【これまでの活動】

平成28年度「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」  
演劇ワークショップの社会包摂機能について状況を分析

平成29年度「演劇による社会包摂プロジェクト」で  
演劇ワークショップの実施、調査・評価を実施

平成30年度～令和3年度「やってみようプロジェクト」  
全国の地域課題解決のワークショップを実施

(主催：文化庁・日本劇団協議会)

## はじめに

福島明夫（日本劇団協議会専務理事／青年劇場）

コロナ禍に見舞われて3年目となりました。今年もオミクロン株感染のあおりを受けながら、本報告書にある通り6劇団で12の事業予定に対し、10の事業を実施することができました。昨年度の報告書では、地域、対象、協力者の3つの広がりがあることに触れましたが、今年は新たに愛媛県西予市で実施することができました。また予算の制約によって事業評価を割愛せざるを得なかったのですが、偶然の機会からさいたま市若者自立支援施設でワークショップ初年度の受講生との出会いがあり、実施困難と思われた追跡調査を行うことができました。本事業の評価を深める上での貴重な果実がまた生まれたのです。

コロナ禍でこの2年間実現できなかったもののひとつが、兵庫県加東市における外国人対象のワークショップです。今年も実施が危ぶまれる中、SNSや日本語教室、大学への宣伝を行い、なんと22名もの参加を得ることができました。参加者の母国もデンマーク、ドイツ、中国、ギニア、ベトナムと5カ国におよび、さらに国際色豊かになりました。この事業は全国に居住、就労している外国人の方々にとってのコミュニティづくりを生かせるものと思います。ダイバーシティを掲げる自治体でぜひ体制、予算を確保していただければと願うもので

すが、日本劇団協議会としてもさらに告知範囲を広げていきたいと話しているところです。

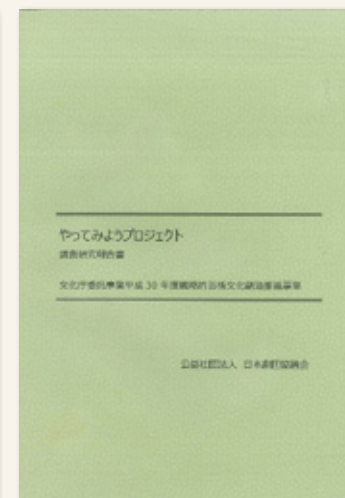
新たな社会的課題ということでは、沖縄の劇団TEAM SPOT JUMBLEが名桜大学との提携で行っている「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族の災害時の共助のあり方について考える演劇ワークショップ」があります。今年は公民館で実施したことで、地域の人びとに在宅療養児の存在を知ってもらう機会をつくることのできたとの報告が寄せられています。地域にはさまざまな困難を抱えた人びとがいながら、顕在化しないことで理解を得られないという問題が多々あります。本事業の社会的役割をまたひとつ教えていただいた経験です。

ふたつの事業について取り上げましたが、本報告書にはさらに多様な、生き生きとした実践例が寄せられています。演劇が、演劇的手法が社会的課題の処方箋としてどう役立つのか、参加者、その保護者、施設職員、そして参加した実演家にどのような影響を与えたのか。ぜひご一読いただき、皆様の街で生かしていただければと存じます。「分断と孤立」が社会的な問題となる現代社会だけにその意義はますます大きくなっています。

平成29年度調査報告書



平成30年度調査報告書



令和元年度調査報告書



令和2年度調査報告書



令和3年度調査報告書



## 令和4年度の「やってみようプロジェクト」活動

### 劇団わらび座

#### 「シアターエデュケーション」

秋田県内特別支援学校生徒に演劇、ダンス、歌唱を組み合わせたワークショップで自由に表現し、コミュニケーションの楽しさを体感してもらうプログラム。

【協働団体】秋田県立能代支援学校高等部／秋田県立支援学校天王みどり学園中学部

【実施回数】秋田県立能代支援学校高等部 全6回\*／

秋田県立支援学校天王みどり学園中学部 全6回\* \*コロナ禍の影響で、延期して実施

### 劇団朋友

#### 「からだであそぼう～コミュニケーションワークショップ～」

【対象】子ども

特別な事情を持ち、施設に居住する養護施設の子どもたち、学童保育や特別支援学校の生徒を対象に、身体で表現したりグループで取り組むワークを行うワークショップ。

【協働団体】児童養護施設杉並学園、西荻北児童館

【実施回数】全8回 ※コロナ禍のため実施できず

【対象】高齢者

高齢者施設に入居中、デイサービス利用の高齢者の方を対象に、身体的・精神的な刺激を通じたQOLの向上を目指すプログラム。

【協働団体】はるびの郷、東村山市東部地域包括センター／白十字会あきつの里

【実施回数】全12回(うちオンライン8回)

【対象】看護師・学生

三恵病院精神科の看護を志す学生、在籍看護師を対象に、他者理解を豊かにするプログラムを中心に行うワークショップ。

【協働団体】医療法人社団恵友会「三恵病院」

【実施回数】全4回 ※コロナ禍のため実施できず

### 秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場

#### 「演劇プログラム」

若者自立支援ルームに集まる若者に、演劇ワークショップを通して交流し表現することにチャレンジしてもらうプログラム。市内2カ所のルームで実施。

【協働団体】NPO法人さいたまユースサポートネット(桜木ルーム／南浦和ルーム)

【実施回数】桜木ルーム 全12回／南浦和ルーム 全7回

### 兵庫県立ピッコロ劇団

#### 「にほんごであそぼう」

日本の生活になかなかなじめない外国人やその家族を対象に、「やさしい日本語」を使って地域の日本人と交流するコミュニケーション・ワークショップ。

【協働団体】小野市うるおい交流館エクラ、小野市国際交流協会／加東市、加東市国際交流協会

【実施回数】小野市 全4回／加東市 全1回

### 坊っちゃん劇場

#### 「演劇教育を活用した就労教育支援ワークショップ」

社会参加や職業自立に必要な表現力・集中力・想像力、コミュニティ形成に演劇スキルを活用したワークショップ。楽器や声を使って自己表現などをする。

【協働団体】愛媛県立宇和特別支援学校

【実施回数】全6回

#### 「がん患者と看護師に対する新しい医療コミュニケーション技法の検討」

がん患者と向き合う看護師を対象に、シミュレーション演劇をととしてコミュニケーションの課題解決を図るプログラム。

【協働団体】四国がんセンター、愛媛県医師会、東温アートヴィレッジセンター

【回数】全10回 ※コロナ禍のため実施できず

## TEAM SPOT JUMBLE

### 「障害者にもわかるヘルスリテラシーワークショップ」

大学生、施設職員とともに、知的障害を持つ方々にもわかる視覚的イメージから理解を促す作品を創作・上演し、健康管理の必要性を届けるワークショップ。

【協働団体】公立大学法人名桜大学、障害者支援施設 海陽園、在宅支援センター ゆいとぴあ、生活介護事業所 かふうや

【実施回数】全8回

### 「コミュニケーションワークショップ」

児童デイサービスや特別支援クラスの児童を対象に、自由に表現することの楽しさや達成感が得られるプログラムのワークショップ。

【協働団体】社団法人スマイリーはうす、社会福祉法人ひんぶん会（児童養護施設なごみ）、公立大学法人名桜大学、沖縄市立比屋根小学校、沖縄市立諸見小学校、沖縄市立宮里中学校

【実施回数】全6回

### 「医療的ケアを要する在宅療養児とその家族の災害時の共助のあり方について考える演劇ワークショップ」

災害時避難所における在宅療養児とその家族への支援について、地域住民、福祉科の高校生、看護学生とともに演劇ワークショップを通して疑似体験し、共助のあり方を体感する。

【協働団体】公立大学法人名桜大学、若狭公民館、沖縄県立中部農林高校福祉科

【実施回数】全3回



## 劇団わらび座 [秋田県]

【実施企画】

### シアターエデュケーション

秋田県内特別支援学校生徒に演劇、ダンス、歌唱を組み合わせたワークショップで自由に表現し、コミュニケーションの楽しさを体感してもらうプログラム。

【協働団体】

秋田県立能代支援学校高等部／秋田県立支援学校天王みどり学園中学部

【実施回数】

秋田県立能代支援学校高等部 全6回\*

秋田県立支援学校天王みどり学園中学部 全6回\*

\*コロナ禍の影響で、延期して実施

【講師】



瀬川舞巴 齋藤和美

【サブ講師】



千葉真琴 小松詩乃 黒木真帆 丸山有子 神谷あずみ

【担当コーディネーター】小澤 威

## シアターエデュケーション



### プロジェクトの経緯

秋田県では「教育立県あきた」を目指し、将来を担う子どもたちを県民挙げて育成するため、学校、家庭、地域、関係機関の密接な連携の下、力強い教育が推し進められている。「自立と社会参加」の実現に向けてコミュニケーション力アップが大きな課題。支援学校においてはその先に児童生徒の「自立と社会参加」を目指している。能代支援学校では「児童生徒一人一人の主体的な社会参加を育むキャリア教育の実践」をテーマに研究を進め、キャリア教育を踏まえた授業づくりや「地域資源」を生かした小・中・高の系統的な教育課程の編成に努めている。高等部では、就労を意識した教育課程を導入しており、専門的知識、技能を修得する目的で介護職員初任者研修講座も開設している。また、これまでミュージカル公演や、夏祭りなどを通して地域交流活動にも力を注いできた。生徒には、わらび座のミュージカルの取り組みを通して「得意なことをもっと得意にしてほしい」「苦手なことにもちょっぴり挑戦してほしい」「チャレンジすることで得られた経験を学習や今後の人生に役立ててほしい」と考えた。表現教育に意欲的な教育現場と、劇団の培った演劇メソッドを組み合わせることで、共に創り合い育ち合う場をつくり上げてもらいたい。

### 劇団の視点

わらび座では「人間と出会う旅」として教育旅行の受け入れを40年以上実施し、観劇と踊り・演劇・農業体験を重ねてきた。「初めて人間に感動した」「一生懸命ってかっこいいんだ」「皆と笑い合えてうれしかった」などと自分や仲間を見つめ、共に笑い・泣き・拍手し合い、子どもたちは心を震わせている。アウトリーチでも「人間と出会う」「生きる力を育む」をコンセプトとし、さまざまなワークショップを実施。能代支援学校では、ミュージカルの鑑賞と演劇・ダンス・歌唱を組み合わせたコミュニケーションワークショップ、表現発表を実施。鑑賞する『風子、飛べー!』は過去のトラウマから言葉を失った少年が、イヌワシの雛の成長と自分を重ね合わせながら自身を見つめ、友達と共に困難を乗り越える中で成長していく勇気と友情の物語。主人公の姿を通して生徒たちにエールを送る。ワークショップでは「ジェスチャーゲーム」「コミュニケーションゲーム」で心と体を開放し、伝え合う楽しさ・喜びを共有する。また、『風子、飛べー!』のダンスや手話歌にもチャレンジし、力を合わせて成功する喜び、表現の楽しさ、感動を共有し、『生きる力』を育み合うことを目指した。



### 実施内容

令和4年

7月20日(水) 参加人数43名

ミュージカル『風子、飛べー!』を観劇してもらう。生徒たちは、物語の世界に入り込み、主人公が立ち向かう時には前のめりになり、乗り越えた時には拍手が湧き上がったりと、感性豊かに観劇していた。出演者も講師を務めるため、その紹介も行う。とても大きな拍手にワクワク感が伝わって来た。

10月26日(水) 参加人数43名

自己紹介＝講師、一芸も／アイスブレイク＝①グータッチ ②笑い声発声／コミュニケーションゲーム＝①仲間集め ②ワンワード&リピート(講師と先生が即興で一言ずつないだ物語をリピート) ③「ありがとう」キャッチボール。  
※ワークが進むに連れて笑顔も増えたが、参加が難しい子もいた。先生と次回に向けて相談する。

11月9日(水) 参加人数29名

自己紹介＝『風子、飛べー!』出演役者が講師で再会／アイスブレイク＝①じゃんけん列車 ②何が落ちた／コミュニケーションゲーム＝①仲間集め ②ワンワード&リピート／表現＝『風子、飛べー!』のダンス・手話歌。  
※なじみのあるワークにしたことで前回よりのびのびとした。またカメラマンを担うことで、生き生きとした生徒さんもいた。

「風になれ」(歌と手話)チーム S・Mさんの感想

わらび座のミュージカルをこれまで2回観て、「こんなに少人数で一人何役もやり、本当にすごいなあ」と憧れる気持ちがありました。ワークショップでは、手話のグループに入りました。もともと手話に興味があったのですが、「風になれ」をやってみて、さらに手話に対する興味が高まりました。手話を使っているいろいろな人とコミュニケーションをとってみたいという気持ちにつながりました。

12月7日(水) 参加人数40名

アイスブレイク＝だるまさんの一日(だるまさんが転んだの体で表現ver)／コミュニケーションゲーム＝仲間集め／表現＝『風子、飛べー!』のダンスと手話歌のグループにわかれ練習  
※先生方も楽しそうに踊るなどして盛り上げてくれる。その姿に励まされ、さらに生き生きとする生徒たち。心と心で交わし合う姿があった。心が動くとも体も動く。

12月14日(水) 参加者40名

コミュニケーションゲーム＝仲間集め(事前にお題のリクエストもらう)／表現＝『風子、飛べー!』のダンスと手話歌にわかれて練習。それぞれ創作する部分にもチャレンジし、個々の自由な発想で表現。  
※仲間集めでは、いつも恥ずかしそうにしていた子が声を発したり、自話しかけてくる子が増えるなどの進捗もあった。

12月19日(月) 参加者40名

表現＝ダンス・手話歌練習／表現発表＝ダンスと手話歌チームで練習の成果を見合う。／スライドショー&振り返り(ワークの様子の写真を見ながら)。  
※カメラマン担当の生徒さんにありがとうの拍手を送る。発表でも手拍子や拍手で盛り上がり、笑顔で一杯に。最後にキャッチボールで「ありがとう」と届けあった。

## だれも取り残さないために、 臨機応変に役割を生み出す方法もあるという学び

秋田県能代市は、1980年に文化会館が完成したのを記念して始まった市民ミュージカルが公演40回を数えるなど、地域にその文化が浸透しているのだそう。そんな背景もあって、知的障害のある児童・生徒への教育を行う秋田県立能代支援学校でも、高等部によるミュージカルの発表が教育課程の中核となっている。今年度が2年目を迎える『シアターエデュケーション』について、能代支援学校の佐藤加奈子先生、わらび座の齋藤和美さん、瀬川舞巴さん、小松詩乃さんに伺った。

仙北市田沢湖の「あきた芸術村」に拠を置き、オリジナル・ミュージカルの上演活動を全国規模で展開する劇団わらび座は、一方で多様な世代に向けたワークショップ（以下、WS）、ミュージカルなどの創作の手伝いを行うなど、地域の活動についても積極的だ。

秋田県立能代支援学校高等部におけるミュージカルについて改めて佐藤先生に伺うと「地域で大切にされている文化を学校でも大切にしたいという思いがあり、創作を通して、生徒が表現することを楽しんだり、表現の大切さを感じてくれると考えています。本校の中学部から進学してくる生徒たちは、先輩みたいになりたいとか、ミュージカルをやるんだという気持ちを持っている生徒が多い印象があります」とのこと。

「失敗はサイコー！」(ダンス) チーム Y・Sさんの感想

ダンスをしてとても楽しかったです。ダンスが好きなので、「失敗はサイコー！」を選択しましたが、もっと好きになりました。自分でも前よりうまくなっていると感じています。わらび座のみなさんの教え方がわかりやすくすばらしいと思いました。「失敗はサイコー！」という歌も、人生いろいろなことがあるけどがんばろうと思えるいい歌だと思いました。来年のミュージカルもがんばるぞという気持ちになりました。

### プロの舞台を見て、表現することの 楽しさを喚起することがWSの一步目に

わらび座と能代支援学校によるWSは今年度が2度目となる。「初年度は、担当の先生からの、プロの俳優が実際にやっていることを教えてほしいという要望がありました。『わらび座ソーラン』（ソーラン節をポップにアレンジして踊るダンス）と、生徒さんたちが秋に上演したミュージカルの台本を使って改めてどう表現したらいいかを考えるプログラムとしました。3年生の生徒さんが本当に積極的で、エネルギーに表現してくれました」（瀬川さん）。しかし、今年は生徒全体の様子も違っていた。「学年によって雰囲気は違うことは結構あって。そのことはWSでふたつの課題を選択して行うという内容にも密接につながってきます」（佐藤先生）の言葉を受け、新たにプログラムを検討した。

「同じ3年生でも今年は、言葉も含めて丁寧に、繊細に表現しようとする生徒が多かったからでしょう。苦手意識を持っている生徒に表現を強いてしまうと、どんどん苦手意識が大きくなってしまっているので、違うアプローチが必要だなと思い、わらび座さんをお願いして『風子、飛べー！』の上演をWSの前に入れてもらいました。ミュージカルを先に見ることで、きっと表現したいという気持ちが湧き上がってくるだ



ろうと考えたからです。それは私たちにとってすごく重要なことでした」（佐藤先生）

『風子、飛べー！』は山里の小学校に通う4年生の鉄平と都会からの転校生・良介が、イヌワシのひな風子をめぐって友情を育み、成長していく物語。鉄平役を瀬川さんが、良介役を小松さんが演じた。二人は公演のことを「あのシーンが良かった、「風子、飛べ！」のセリフから勇気もらった、表現することの楽しさを知ったなど前向きな感想をたくさんもらえてうれしかった」（小松さん）、「じっと真剣に集中している子もいれば、笑いながら見てくれている子もいて、どの子も何かを感じてくれたと思う」（瀬川さん）と語る。

### 居心地よくいられる場所にするために、 入り口の選択肢を増やした

WSのリーダーを務めた齋藤さんはWSをこう振り返った。「今年度は人前で表現することへの苦手意識がある生徒さんがいたのかもしれませんが。初日のWS時、緊張のためか固まってしまう子が多かったです。楽しもうと体いっぱい、心いっぱい、表情いっぱいに表してくれる生徒さんとの差がだいぶありました。そのため私たち自身がどこに軸を置いてWSをつくったらいいのか悩み、佐藤先生にも相談し、メニューも一つ一つ承諾をいただきながら組み立てていきまし

撮影チーム S・Kさんの感想

これまで写真や動画を授業で撮ることはありましたが、WSのように「動くもの」を対象にするのは初めてでした。みんなのためにどういうものを撮ればいいのか考えながら撮影しました。撮影したものをスライドショーにしてみんなに観てもらいましたが、自分や教えてくれた先生ではなく、第三者という別の視点で写真を見てもらったことで、「こういう写真もってほしい」とかコメントをもらったのがうれしかったです。

た。一人も取り残さず、参加はできないけど、そこにいて居心地がいい場所をつくりたかったのです」

そうした経緯を踏まえて、『風子、飛べー！』の中に登場した要素を体験するプログラムで、手話を使った歌と、踊りというふたつのグループをつくった。

2回のWSを経て、それでも仲間に入りずらそうにしている生徒には、WSの様子を映像とスチールで撮影する役割を担ってもらうことにした。大事な役割であることをより意識してもらうために、一眼レフのカメラなど本格的な道具を渡した。

「私自身、WSはそれぞれが持つ魅力を見つけるきっかけづくりだと考えています。いろいろな出会いを重ねて経験を積んで、自分や人を知っていくことが大切。講師はそのために、常に目の前の子どもたちが何を感じているかを考えて、声をかけ、その子の新しい魅力を見つける手伝いをする。私自身も発見しています。今回のWSでは、生徒さん自身がそれぞれの役割に向かって、自分なりに取り組んでいたことが伝わってきました」（瀬川さん）

「私が大切にしている『風になれ』という曲を使って、生徒さんたちに手話を使った踊りを伝え、私も一緒に踊りました。この歌詞はこんな気持ちを込めてみようかとか提案しながら進めていきました。ダンスチームと比べたら、体で

表現することが苦手な生徒さんが多かったかもしれません。でも表にはさほど出さなくてもそれぞれに個性があることを感じたので、自由に踊ってほしい場面を自分色に染めてもらいたいと、一人ひとりにどうやりたいか聞いていくと、しっかり答えが返ってきたんです。それを踏まえて表現してみようと言ったら、動きがすごく大きくなって。自信を持てば、こんなに表現の仕方も変わるんだなと私自身の学びにもなりました」(小松さん)

また撮影を担当した生徒は4人だった。最後の発表の時間には歌やダンスと一緒にスライドショーで撮影した写真を全員で楽しんだ。「撮影を担当した生徒さんたちにも拍手を送りたかったんです。私たちにとってもWSの中

でこういうかわり方ができるんだと発見になりました」(齋藤さん)

今年度から担当になった佐藤先生は、WSをこう総括する。「ミュージカルの指導を私たちがやるのと、本物の役者さんにやっていただくのではやっぱり全然違うものですね。私たちが声をかけても「嫌です」と言われてしまうことがあるのですが、わらび座の方に声を掛けていただくと「やってみようかな」となる。表現することが苦手な生徒の変容もありましたし、得意な生徒たちはより好きになったよう。普段学校で踊っているダンスよりもずっと大きく動いて、役者さんたちのように踊ってみたいという思いが伝わってくるんです」(佐藤先生)

## シアターエデュケーション

in 秋田県立支援学校天王みどり学園 中学部

秋田県立支援学校天王みどり学園でも、小・中・高とお芝居の取り組みに力を入れ、演劇的手法を用いて、生きる力を育てている。生徒さんは、自分の気持ちを伝えるのが苦手な子、言語理解が難しい子、声を発するのが苦手な子などさまざま。表現の楽しさを知ること、自己表現力・コミュニケーション力を付けることを課題とした。劇団側からは能代支援学校と同様の提案を行った(※観劇は歌舞舞台)が、発声と、感情やイメージを声や体で表現する事に注力した。ワークショップの回を重ねるごとに反応が良くなり、受け答えの回数や参加している時間も増えた。また、普段より行動



が早くなったりと自主性・積極性も出てきた。シアターエデュケーションを通して、心と体いっばいに表現を楽しんで皆で笑い合うこともでき、課題である自己表現力・コミュニケーション力がアップするとともに、協調性も育った。



## 劇団朋友 [東京都]

【実施企画】

### からだであそぼう ～コミュニケーションワークショップ～

【対象】子ども

特別な事情を持ち、施設に居住する養護施設の子どもたち、学童保育や特別支援学校の生徒を対象に、身体で表現したりグループで取り組むワークショップ。

【協働団体】児童養護施設杉並学園、西荻北児童館

【実施回数】全8回 ※コロナ禍のため実施できず

【対象】高齢者

高齢者施設に入居中、デイサービス利用の高齢者の方を対象に、身体的・精神的な刺激を通じたQOLの向上を目指すプログラム。

【協働団体】はるびの郷、東村山市東部地域包括センター／白十字会あきつの里

【実施回数】全12回(うちオンライン8回)

【対象】看護師・学生

三恵病院精神科の看護を志す学生、在籍看護師を対象に、他者理解を豊かにするプログラムを中心に行うワークショップ。

【協働団体】医療法人社団恵友会「三恵病院」

【実施回数】全4回 ※コロナ禍のため実施できず

【講師】



西海真理 水野千夏 平塚美穂 岸ゆりえ 武藤麗子 敦澤穂奈美 鈴木千晶

【コーディネーター】夏川正一



## 劇団朋友

### からだであそぼう～コミュニケーションワークショップ～（高齢者）



#### プロジェクトの経緯

「やってみようプロジェクト」は以前より劇団としてコミュニケーション・ワークショップを演劇の使命のひとつと捉え試行錯誤しながら実施していた。プロジェクトがスタートし行政組織やさまざまな施設、学校などを訪問したが、なかなか理解と共感、時間と場所を得られず苦勞していた。そんな中、東村山市の東部地域包括センター・はるびの郷との出会いがあった。

はるびの郷は特養施設で、介護度がかなり高い利用者があり、そうした方たちでもできる試みを探していた。コミュニケーション・ワークショップの内容を聞き、要介護者が声を出す表現を行ったり学べたりする機会は無効であり、スタッフがサロン活動をする上でもWSの技術には現場で生かせるのではないかと考えた。

#### 劇団の視点

当劇団ではこれまで介護施設、特別支援学級、学童保育、病院、小学校、養護施設などでワークショップを行なってきた。演劇の手法を使ってワークショップを行う目的は「他者理解を深め、自己肯定を育み、より豊かな生活の実現を目指す」ことにある。高齢者の場合、特に独居の方は人と話す機会がほとんどないケースも多く、口の周囲をはじめ筋肉がどんどん衰えてしまう。それに対して大きな声を出したり深い呼吸をしたりすることによって、脳を活性化させる。それは元気になることにつながる。それぞれの抱える課題は違えども、それぞれの環境で少しずつ成果を上げている。

#### 実施内容

令和4年

10月18日(火) zoom = 参加者5名

呼吸＝吸うときは手を挙げ、吐くときは手を下ろしながら。徐々に数を増やしていく／自己紹介＋好きな果物／画面越しに両手で握手。握手の手をいろいろ動かす／体で物まね＝一人が体の一部の名称を言って一斉にみんなでタッチ→連続の動きをみんなでまねる／言葉探し＝トランプを選びその裏に書いてある文字から始まる言葉を探す→トランプを選びその言葉の裏に書いてある物を探す（動物、野菜etc.）／呼吸＝参加者の指定した数で呼吸する

12月18日(日) 参加者23名

白い小さなふわふわなものをイメージしてお隣りに渡していく／呼吸＝だんだん数を増やして／輪になり、私あなたとだれかを指して続ける→自分の名前と相手の名前を呼んで→呼ばれたとき断ってもいい（相手をいかに傷つけず優しく断るか工夫をして）／Uber Eatsの配達人になって料理を運ぶ。配達された人は大好きな食べ物を注文した人を演じ、自然に生まれた会話を楽しむ／「幸せなら手を叩こう」を合唱（手だけでなくいろいろアレンジする）／呼吸＝参加者の指定した数で呼吸する／感想アンケート記入

令和5年

2月14日(火) zoom = 参加者6名

呼吸＝徐々に数を増やして／自己紹介＋好きな色／画面越しに両手で握手→参加者がリード／体で物まね＝参加者がリードする／1・2・3：1・2・3のそれぞれの動きを決めて、リーダーの言う数を身体で表現。→4・5・6の動きを参加者にリクエストしてその動きもプラスする／言葉探し＝トランプの裏の文字から始まる言葉→トランプの裏の言葉の物を探す。動物、楽器などが出たらそれを身体で表現／呼吸＝参加者の指定した数で呼吸する

2月21日(火) 参加者27名

呼吸＝徐々に数を増やして／枕詞自己紹介＝自分の名前の頭文字の言葉を頭につけて（「マンガが好きなまりです」の要領）／ペアで1・2・3と発声して繰り返す→1はばんざいの動きで無音・2・3は発声→1バンザイ・2両手をVサインで頬に当てて無音・3発声→1バンザイ・2両手を頬にVサイン・3は両手を前にひらひらさせて無音→参加者が1・2・3の動きをリクエストする／ナイフ＆フォーク＝お題の役割を決めて、一斉に身体で表現→役割を決めずに一斉に表現→4人1組になってお題を一斉に表現／「幸せなら手を叩こう」を合唱（手だけでなくいろいろアレンジする）／感想アンケートに記入

## 他者理解を進め、自己肯定感と生きる力を育む

特別養護老人ホーム入居者やデイサービスの利用者などを対象にしたコミュニケーションワークショップ(以下、WS)「からだであそぼう」。心と体の両面からアプローチすることによって、QOL(生活の質)の向上を目指す試みは、参加する高齢者だけでなく、介護に従事するスタッフ、地域で高齢者サロンにかかわる方たちにも、効果が実感できる場となっている。東村山市東部地域包括センターの柴原りささん、はるびの郷の徳山滋久さん、劇団朋友の西海真理さん、夏川正一さんにお話を伺った。

### 前向きに元気になるために

はるびの郷と朋友の出会いは2017年。以来、コミュニケーションワークショップ「からだであそぼう」を継続して行なってきた。

「最初は地域の方向けのWSを実施しました。それが純粋に楽しかったんです。参加した高齢者の方たちの反応もそうでした。同時に、こういう活動があるのだ、と新しさもすごく感じましたね。声を出すとか表現することを学ぶのは、僕ら介護の現場でも生かすことができます。参加者の中には地域のサロン活動を担っている方もいて、こういうコミュニケーション技術はすごく役に立つというご意見が多かったです」(徳山さん)

はるびの郷内に設置されている包括センター

### あるスタッフさんの感想

皆さん新しい言葉や動きがあっぴゅりしました。初のみっちゃんもスムーズに参加できてよかったです。後半は疲れていたのでも退出していただいた方が良かったかも。茶子ちゃんはフロアで過ごしているより生き生きとしていました。

は介護・医療・保健・福祉などの側面から高齢者を支える相談窓口を担当している。

「WSの中で自然と笑いが生まれ、終わった後に、あんなに笑ったのは久々だという感想をよく聞きます。最初は緊張されている方が多いだけに、素晴らしいことだと思います」(柴原さん)

当初、はるびの郷内で実施されていたWSは、地域のサロンごとに主催・共催されるなど、活動のフィールドを広げている。

「高齢者の場合、特に独居の方はしゃべる機会がなかったりするので、しゃべる力や口の筋肉はどんどん衰えていきます。1時間程度のWSの間に深い呼吸をしたり、大きな声を出したりすることによって、脳が活性化します。たとえば飴玉を舐めるように舌の筋肉を動かすことで、歯や口の機能が衰えた状態にならないようにしたり。普段使わない体で何かを表現したり、音楽に合わせて動いてみたり。そうした体験を通して、前向きに元気になって、ちょっと外に出てみようと思っていただく。それがWSの目的であり、日々の生活が豊かになることを目指して、簡単なことからプログラムを組んでいます」(西海さん)

### 高齢者に芽生えたチャレンジ精神

コロナ禍もリモート方式でWSを継続。PC



モニターを通して交流する工夫をした結果、自己発信できるようになった参加者もいるようだ。

「プログラムをつくる上で大切にしたのは、自己原因性感覚というのですが、自分はこのようにいいんだ、ここでは何かを発信していいんだ、という感覚を生み出していただくことでした。だから無理に決められた動きをそらしていただくのではなく、どんな動きでもOK、何でもありという姿勢で全部認めていくことをモットーにやっています」(西海さん)

「つまりこれは、他者理解を進め、自己肯定感を育み、生きる力を育てていくWSでもあるんです」(夏川さん)

はるびの郷にとっては、「からだであそぼう」をやっていると、自然に人が集まってくるのが印象的だったとのこと。

「特別養護老人ホームやデイサービスから参加している方たちを見てみると、我々職員では引き出せないような表情が表れたり、チャレンジ精神が湧いてくる。WSの後は必ずアンケートを取るのですが、字が書けなくなっている方も回数重ねるごとに「自分で書いてみようかな」と意欲が出てきて。やってみようという気持ちが出てくるのがすごいし、効果として大事だと思っています。WSを通して、こんなに協調性がある人だったのか、とか新たな一面を発見することもありますね。講師の皆さんがすごく上手に高齢者の方たちに接しられているのを見て、こうすればいいのだなと私たちも学ばせてもらっています」(徳山さん)

### 多世代をつなぐ可能性

朋友のWSの土台になっているのは、西海さんが文化庁在外研修時にイギリス・ロンドンで習得したドラマ教育法だ。

「イギリスのように演劇のツールを生かしたWSが年間を通してあれば、参加者一人一人の変化がより見えてくるのでは」(西海さん)

その経験や気づきを朋友では、積極的に劇団内でも取り入れている

「ファシリテーションできる人材が必要になります。すでに劇団ではファシリテーターを育てるエデュケーションWSで研鑽を積んだメンバーたちがいる。今後は病院や児童養護施設、小学校へと広げてこの活動を継続していきたいと思っています」(夏川さん)

WSによる変化は個人差があり、数値化が難しいところもあるという。

「高齢者施設ではこういう取り組みを行なってこんな変化があったという症例を発表する大会があるので、そうした機会に届けられたらいいのではないか」(徳山さん)

「WSを知らない方にどう情報を届けるかも課題です。回数を増やしていくことで、新たな参加者が増えてくれればいいと思います。私は自分の子どもを連れて参加したりするのですが、高齢者の方たちと違和感なく楽しめるんです。分断の時代と言われる今、多世代がつながるという意味でも、WSに大きな可能性を感じています」(柴原さん)

## 劇団朋友

### からだであそぼう～コミュニケーションワークショップ～

【対象】子ども

杉並学園、西荻北児童館の課題

DVやネグレクトなどの事情で家族と一緒に暮らせない子どもたちが、少人数型施設でグループ生活をしている。仲間とばかりで固まってしまう、環境に溶け込めない子どもたちも散見する。WSを通して子どもたちが学校生活に溶け込んでいく、周囲も彼らが変われば変わっていく。そのようなことが期待され、成果が出ている。施設を卒業して、社会に飛び出していく一助になることも期待できる。

WSでは規律もなく安心して何にでも取り組める場所を提供することで、表現活動を楽しみながら自己肯定感を育てていくことを大切にしている。本年はコロナ禍と施設の老朽化に伴う建て替え工事が発生し、WSの実施は中止せざるを得なかったが、職員と連携、意見交換しながら次年度の実施を目指したい。

【対象】看護師・学生

三恵病院の課題

三恵病院には精神科がある。精神的疾患を患った方に、処方する薬と同じように、デイケアに通ってくる人を対象にしたWSを企画した。患者さんだけでなく看護師の方々にもともに参加していただき、ケアをする看護師の方たちや、併設・協力関係にある看護学生たちの実習の一部としての実施も計画されていた。

入院をせずに通院する患者さんたちが社会に溶け込むための一助になってほしい。みんなで集まって楽しくやることで影響を与え、他者理解と自己肯定を進める。看護師としてのスキルアップや学生の経験としても有意義なものである。そうした効果が期待されていた。本年はコロナ禍の影響により病院内に立ち入ることができずに中止を余儀なくされたが、次年度へ向けて医師や看護師と相談しながら成果の定量的数値化を目指したい。



## 秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場 [埼玉県]

【実施企画】

### 演劇プログラム

若者自立支援ルームに集まる若者に、演劇ワークショップを通して交流し表現することにチャレンジしてもらおうプログラム。さいたま市内2カ所のルームで実施。

【協働団体】

NPO 法人さいたまユースサポートネット（桜木ルーム／南浦和ルーム）

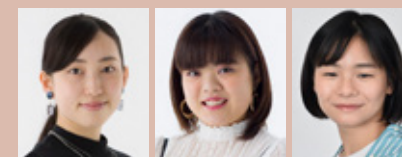
【実施回数】

桜木ルーム 全 12 回／南浦和ルーム 全 7 回

【講師】



岡本有紀 板倉 哲 大嶋恵子 中津原知恵



原田真衣 五嶋佑菜 小切伊知子

【コーディネーター】佐藤尚子

## 演劇プログラム



### プロジェクトの経緯

「さいたま市若者自立支援ルーム」は、さまざまな理由から、高校中退や不登校、ひきこもり、貧困などの悩みや問題を抱え、社会において孤立感を感じている高校生から30代の若者たちに、安心・安全に過ごせる「居場所」を提供している。ルームの活動は、平日の日中に開室しており、雑談や絵画、手芸、音楽など曜日に決まったプログラムや、季節行事に連動したイベントを開催している。個々の利用者の事情を考慮し、職員間で情報を共有し、地域の多様な支援ネットワークと共同して、きめ細かい支援を目指している。

演劇プログラムとしては、「ルーム」には他者との交流が不得意な利用者が多いことから、ワークショップを通して自己表現や他者と交流する喜び、目標に向かって努力する楽しさを発見することを課題とした。その過程で、新たな価値観に出会うことで自己を知り、他者理解を深め、コミュニケーション力を培い、自己肯定感を得て自立・社会参加への足掛かりになることを目指した。合わせて、「ルーム」の社会的認知を広げる活動にも期待があり、居場所を求めている若者とルームのつながりを支えてほしいという要望もあった。

### 劇団の視点

「ルーム」でのワークショップは今年度で6年目となる。参加者には他者の目を見ることができなかつたり、声も小さく表情も乏しい若者も少なくない。しかし初年度から楽しくプログラムを重ねることで、クリスマス会で本格的な上演を成功させた。80余名の観客から拍手を浴びた彼らは急に変化を遂げ、数人はワークショップの常連になり、自作の戯曲を持ち寄るようになっている。ただ参加者は精神的に不安定な若者もいることから、必ずしも参加者が一定しないのも課題。一方で「ルーム」スタッフの積極的な呼びかけや教育関係の刊行物やラジオなどの取材を通して注目が集まり、仮登録の利用者もしばしば参加してくれているのは継続の成果と言える。

今年度も、仲間とともに創造し、表現することで演劇の楽しさを発見し、自己表現の向上、他者理解を深められるプログラムを検討した。「毎회가出会い直し」となる状況も考慮し、非日常の時間を楽しめるように、緊張をほぐすシアターゲーム、理屈抜きに笑い合える短いコントの読み合わせを実施した。

今後は参加者の保護者にも、演劇プログラムの意義を届け、社会的認知を広げる手がかりにできないか、スタッフとともに検討したい。

### 実施内容

令和4年

**6月22日(水)** 参加者7名

自己紹介／シアターゲーム「フルーツバスケット」／「リーダーを探せ」／利用者の創作作品の読み合わせ／感想交流

**7月27日(水)** 参加者7名

自己紹介／講師によるパフォーマンス／利用者の創作作品の読み合わせ／感想交流

**9月7日(水)** 参加者8名

自己紹介／シアターゲーム「フルーツバスケット」／利用者の創作作品の読み合わせ(2作品)／感想交流

**10月26日(水)** 参加者11名

自己紹介／シアターゲーム「フルーツバスケット」／利用者の創作作品の読み合わせ／感想交流

**11月30日(水)** 参加者8名

自己紹介／30分の短編作品読み合わせ／ルームのイベント・音楽フェスで上映するための撮影／シアターゲーム「絶叫じゃんけん」／感想交流

令和5年

**1月11日(水)** 参加者9名

自己紹介／講師によるパフォーマンス／利用者の創作作品の読み合わせ／荒立ち稽古／動画を見ながらの今年度の振り返り／シアターゲーム「フルーツバスケット」／感想交流

※今年度はコロナ禍で「上演発表してみたい」という利用者の要望を形にできずにいた中で、一つの案として、毎回の読み合わせを録画し、うまく編集できた物を観客に披露することも行った。また利用者が外出制限中に創作への意欲が湧いたのか、戯曲の持ち込みが急激に増え、作品はコント・青春ラブストーリー・哲学的ドラマなど個性豊かで完成度も高くなってきた。

## 日常から逃れた安心安全な場所だからこそ、ワークショップで大胆な遊びに挑戦できる



さいたま市若者自立支援ルームは虐待や貧困など深刻な問題を抱える利用者の居場所として、表現やスポーツ、農業など多彩なプログラムで自立を支援している。2017年度から大宮のルームで開始した青年劇場のワークショップ（以下、WS）が彼らの折れそうな心の支えになったことから、2021年度に新規オープンした南浦和のルームでもWSを取り入れた。2年目の本年度はコミュニケーションゲームを通して自己表現の楽しさ知ったり、戯曲を読んで演じたりする中で、心を解放し、自信をつけていく様子が見られた。南浦和ルーム担当の新藤永実子さん、青年劇場の岡本有紀さん、板倉哲さんに伺った。

大宮のルームでの2022年度の活動を振り返り、講師のお一人、板倉さんは「過去6年は緩やかに人間関係を築いていくことを試みましたが、本年度はクリエイティブな遊びに短時間で飛び込めるようになった」という印象を持つ。ルームの利用者はさまざまな理由で極度の不安やストレスを抱えており、WSに集まる顔ぶれは日によって変わる。

青年劇場のWSには、数ページのコントで遊ぶプログラムがある。参加者の一人が、自分の書いたコントを披露したのをきっかけに、我も我もと書くようになり、急ぎょ実施した戯曲講座も手伝って利用者たちがさまざまな戯曲を書

くようになった。そして互いに評価し合う関係までになった。

### 「もっとやってほしい」というリクエストも

南浦和のルームは10～20代の若者、女性の利用者が多いのが特徴。新しい利用者も多いため、初年度は遠慮がちな雰囲気があった。しかし今年度に入り、WSに合わせて通うリピーターが現れたり、ジャンケンで演じる役を取り合う積極性が見られたり、「演劇って楽しい。もっとやってほしい」というリクエストの声も出た。

新藤さんは「初参加の子には「こういうことをやるよ」と事前に説明をしたり、参加しなくても気軽に眺めることができるようにしたり、という工夫をしています。ほかにも文字を追うのが苦手な子には台本を色分けして読みやすくしたり、聴覚障害の子には板倉さんが手話でお話ししてくださって、ケラケラ笑いながら過ごせるようにしてくれたり」と振り返る。そんなルーム側のサポートについて、講師陣は感謝を口にする。

「何よりWSを盛り上げてくださる。利用者さんを見守りながら、真剣に楽しんで一緒にやってくれることで利用者さんたちの安心感につながっている」（岡本さん）

「そう。安心安全な場所や関係をつくっている

からこそ、WSで大胆な遊びに挑戦しても利用者さんが応えてくれる。ルームでの日常的なかわりがあるからこそ、非日常の遊びに意味があるんだと改めて気づいた」（板倉さん）

たとえばひきこもりの利用者が、ひきこもり役を喜劇的に演じたところ、周囲の称賛を得たことから、「楽しくてしょうがない」とすっかり笑顔が似合う子になった。「100か0かと考えがち」な子の場合「演劇って正解がないし、失敗してもいい。WSを通して今の自分を壊しているんです」と目的を持って参加する中で、自信をつけ、ルームのイベントでも10分もの朗読の発表を堂々とできるまでになった。

「ほかの人を演じるという稀有な経験に効果があるのでしょうか。演劇の持つ不思議な力は何だろう」と新藤さんは前向きになっていく利用者の姿に驚嘆する。

一方、利用者の変化によって、周囲にも変化が起きた。

「ある利用者の保護者の方は、ひきこもりなどの子は人前で表現するなんてできないという意識があったそう。けれど実際にお子さんが参加して楽しい楽しいと言うものだから、「そんなに楽しいのならどういふものか参加したい」とルームにいらっしまったこともありました。ひきこもりのお子さんを見守る中で孤立しがちな保護者の方などの居場所づくりとしても可能性があるかもしれません」（新藤さん）

WSを実施する青年劇場にとっても、長年の積み重ねが変化をもたらした。板倉さんは「自分を表現することの楽しさを伝える側のはずなのに、利用者の方々から演劇の根本に触れる機会をいただいた」と、本来の活動への刺激にもなっている。

### WSから発表という経験へ

南浦和と大宮両ルームでのWS実施による効果として、南浦和の利用者が「自分も長く続ければ、大宮の人たちのような脚本が書けるかもしれない」と目標を持っているそう。また大宮の利用者からは「自分の書いた脚本が南浦和の人にどう受け入れられたんだろう」と気にかけている。スタッフからは「合同でイベントをしてみたい」との声もあり、新たな交流につながりそうだ。

「WSという定期的な楽しみの場だけでなく、目標に向かい達成する経験もできるよう、発表の場を増やしていきたい。やっぱり発表を経ると、緊張しつつも一皮むけて、自信をつけていくのを感じます」（新藤さん）

「発表も、2拠点の交流もぜひ機会をつくりたい。その時には初めての方が入りやすいプログラムを意識しつつ、多くの方に参加していただけるよう継続性を意識しなければいけないですね」（岡本さん）

### 参加者の親御さんの感想①

演劇と生演奏の方はハマっちゃったんで。だから演劇の方で、もっとみんなにわあ〜と来てもらえたら楽しんだろうなって思うんだけど。発表会とかね、できたら良いなって思いますね。

### 参加者の親御さんの感想②

演劇も今年は月1回って、もうちょっと回数ができればやってもらいたいと思うけど…みなさんお忙しいだろうから。そこらへんは調整しながらなんだろうけど、希望としてはありますね。

## あるボランティアさんの感想

「ルーム」での演劇プログラムには利用者のサポートのため、施設スタッフやボランティアスタッフの大人たちも当初から常連メンバーとして参加している。人生経験と教養豊かな大人たちの言葉が利用者に影響を与えて、作品や演技の相互批評の視点が広く深くなってきていると感じる。逆に大人たちの目には、このワークショップがどのように映っているだろうか。ボランティアの北村浩さんに感想をいただいた。

## 演劇ワークショップに参加して

本年度も桜木ルームと南浦和ルームでの演劇ワークショップの双方に参加することができました。参加しているメンバーがほとんど重なっていないので、それぞれの場所で異なった特徴が見られたと思います。参加者の多くが演じるということを楽しむことに重きを置いていたところや、自作の



短い演劇台本を持参し、それを参加者が演じることに重点の置かれたところがありました。講師の方たちが、それらの特質をうまく受け止め、ニーズによりそい、コミュニケーションの空間として、うまく成立させていたことが印象的でした。

演劇というアプローチから社会へと接近する試みとして、自己の未知の部分と出会い、異なる存在に触れることにより、つながりやかかわりが得られたと思います。社会性という観点で、シティズンシップやデモクラシーが求める資質とはいかなくとも、それらが着実に参加者にとって意味のある、これからのステップとなることでしょう。

## ある参加者さんの感想

僕は両親と兄の4人家族。家族は表向きは人当たりは良いが、僕が発達障害であることを、かかりつけの医師の立ち会いで打ち明けても理解してくれるどころか、受け入れてくれなかった。僕は何かにつけて怯え、素直になれないところがあって人間関係を築くのは苦手だった。小・中学といじめにあって、それでも通っていたが、高校を卒業してからいよいよ人生でもっとも孤独な迷走期に入ってしまった。自分で進路を決められず、進学にこだわる両親の言うままに受験したが失敗し、代わりに合格した大学に通い始めたものの休みがちなり辞めてしまったところからうつ病が発症する。家族以外に頼れる人を探し、関係を築いておくべきだったといまだに後悔している。

2017年4月に、就労支援窓口「地域若者ステーションさいたま」に相談し、若者自立支援「ルーム」を紹介され、通うことにした。家にいるのも嫌だし、孤独も長かったので、人との出会いを求めていたのだ。ルームに通い始めてからは親しい人と話すことが唯一の過ごし方だった。でもそれだけでは満足できなかった私は、演劇プログラムがあることを知り、嬉しかった。自身を表現したいと思っていたから。演じることは恥ずかしかったけれど、それに勝る楽しさがあった。指導してくれた青年劇場の皆さんからも褒められ、やりたいことがで

きている喜びから気持ちも充足していった。一番好きだったのはシーンスタディだ。台本を読むといろいろな表現が湧き上がってきた。その年のクリスマス会、翌年の文化発表会では劇に参加した。役を演じていても、ありのままの自分を表現できているような気がした。お客さんにも多くの声を掛けてもらった。その後の私はルームのイベントでは司会に立候補したり、演劇以外のプログラムにも参加するようになった。また紙芝居にハマって実際に読んだりもした。自分でプログラムを考え、開催したこともある。演劇プログラムにそのくらいのパワーをもらったのだ。

2020年には青年劇場の公演を見るため友の会に、2021年の夏にはもっといろいろな演劇に出会うために地元市民劇場にも入った。今年になって映画を観るようになった。その間には介護の仕事も始め、体力はしんどいけどなんとか続けている。

今、私が考えていることは、芸術は無限の可能性に満ちており、特に演劇は感性を刺激してくれるものだから、多くの人びと、特に同世代にもそのことを知らせ享受してほしいと思っている。市民劇場にも若い仲間に入ってほしいし、ルームや他のユースの活動にも取り入れたいということ。そして僕自身ももっと知らない人と出会ってみたい。

「やってみようプロジェクト」では今年度、各講師・コーディネーターが、各地の実施現場に参加し、互いのプログラムを体感する機会を設けました。講師のスキルアップ、また協働団体・地域連携などの情報共有によりコーディネーターの人材育成を目的としています。



ピッコロ劇団×小野市国際交流協会×エクラ  
「にほんごであそぼう」在日外国人対象ワークショップ

中村茂昭（坊っちゃん劇場）

『にほんごであそぼう』で扱われているテーマは、これからの日本において必須の課題であることは間違いないと思います。その地域その地域の新たなコミュニティづくりの一環として、演劇の手法を使ったワークショップが提案できそうだなと感じました。

同時にお芝居に興味のない一般の方たちを集めてのワークショップということで、なかなかハードルが高いのではと思います。また、参加者の年齢も0歳から70歳近い方までいらっしゃるということで、効果や実感などを生むワークショップにすることは至難だと言わざるを得ません。そもそも、楽しむことを目標にプログラムを作成されているのだろうかと感じました。

地域ごとにワークショップに対して求められる形がいろいろあるかもしれないですが、多様な参加者の皆さんと交流しながら、一緒にワークショップをつくっていけると、新たな発見や自己の修正ができるのではないのでしょうか。

開始時間の設定の仕方を考えることで、次回以降、早く会場に集まってきた参加者の皆さんが損をした気持ちにならないようにできるのではないかと思います。かといって参加者に合わせ過ぎてしまうと、内容や時間の読みにまで影響が出てしまうことがあります。しかしながらピッコロ劇団の方々はさすがプロフェッショナルで、しっかり回収して、事故やケガもなく終えられたのは、これまでに培われてきた経験や機転の利かせ方の素晴らしさだなと思いました。

今回の研修のように、参加しながらのワークショップは、サポートに回るだけでも大変勉強になりました。言葉の選び方、受け入れ方、回し方など私にはまだまだ足りないことだらけです。参加者の皆さんのためのワークショップであるということを改めて確認し、テーマや目標設定など柔軟さを身につけたいと思います。まだまだ、やれることは多いのだと感じています。



## 兵庫県立ピッコロ劇団 [兵庫県]

【実施企画】

### にほんごであそぼう

日本の生活になかなかなじめない外国人やその家族を対象に、「やさしい日本語」を使って地域の日本人と交流するコミュニケーション・ワークショップ。

【協働団体】

小野市うるおい交流館エクラ、小野市国際交流協会／  
加東市、加東市国際交流協会

【実施回数】

小野市 全4回／加東市 全1回（新型コロナウイルス感染拡大により1回中止）

【ファシリテーター】



本田千恵子 菅原ゆうき 杏華 木之下由香 木村美憂

【担当コーディネーター】田窪哲旨

【アシスタントコーディネーター】磯部 聡 河東真未

## にほんごであそぼう



### プロジェクトの経緯

平成30(2018)年度に向けて、(公社)日本劇団協議会が、「やってみようプロジェクト」に参加する芸術文化施設を広く募ったところ、兵庫県で手を挙げたのが、小野市うるおい交流館エクラ。エクラの事業マネージャーが、かつて勤務していた別施設で、兵庫県内の協議会加盟劇団である兵庫県立ピッコロ劇団と子どもたちとの演劇づくりで協働した経験もあったことから、協議会はエクラとピッコロ劇団をマッチング。当初は教育現場での実施を想定していたが、地域が抱える社会的課題を探るなかで浮上してきたのが在住外国人の問題。近辺に工業団地を抱えており、小野市周辺に在住する外国人が増加している中で、エクラ内に事務所を持つNPO法人小野市国際交流協会がたいへん苦勞しているという状況がわかった。

そこで、地域コミュニティになかなかなじむことができない外国人を対象に、演劇ワークショップを通して、職場と住居以外の、安心安全な環境の中で日本語を使い、交流を広げる場を提供できないかと考えた。以来現在に至るまで、国際交流協会、エクラ、ピッコロ劇団の連携のもと、年度ごとに内容や対象を検討しつつプログラムを展開している。

### 劇団の視点

兵庫県立尼崎青少年創造劇場〈ピッコロシアター〉はミッションのひとつとして、「社会包摂につながる芸術活動の推進によるコミュニティの再生」を掲げており、附属するピッコロ劇団も、子どもや高齢者、障害者に向けて多くのプログラムを実施してきた。

しかし、外国人向けのプログラムは初めてだったので、現在彼らがおかれている状況、国際交流協会が苦勞していることなどについて、時間をかけてヒアリングすることから始めた。聞き取りにより、外国人同士の交流も少なく、日本人コミュニティとも溝があること、そして日本語教室で学んだ日本語を安心して使える場が限定されていることがわかった。

そこで2018年度は外国人の交流の場、2019年度は外国人と地域のキーとなる日本人(職場の方々や地域のボランティア、市役所の方など)の出会いと交流の場、2021年度は、孤立しがちな親子に参加してもらおう親子の回を実施と毎年テーマを深めている。そして2022年度は、災害時に外国人がとりこぼされないように、防災をテーマとした回を実施。試行錯誤しながらの実施だったが、小野市役所防災担当者やボランティアの方々の協力も得て、参加者には楽しく防災についての認識を深めてもらうことができた。



### 実施内容

令和4年

#### 9月18日(日)〈親子対象回〉

参加者 64名(ベトナム50名、ペルー5名、日本9名／おとな39名、子ども25名)

視察者12名(全国公立文化施設担当者、研究者など)

自己紹介／円になって座ったままでグーパーまわしやクラブまわし／四方に架空の壁をつくって、その中で自由に歩く、あいさつする／「だるまさんが転んだ」のルールを使って、グループで造形あそび／「動詞でダンス」まげる、のばす、たたく、おす、などの動詞を身体で表現、音楽にあわせてダンスに／フィードバック

令和5年

#### 1月14日(土)〈防災回〉

参加者 33名(ベトナム3名、フィリピン1名、中国2名、シリア3名、カナダ1名、インドネシア2名、ペルー4名、日本17名(防災ボランティアなど))

円になってグーパーまわしやクラブまわし／自己紹介／市役所防災担当者による地震などの災害や、避難場所、避難所についての説明／避難場所のピクトグラムに見立てたいくつかの円の中にグループになってわかれて、あいさつ、自己紹介、そして「ひょうご防災アプリ」の登録／避難所のピクトグラムに見立てた3人組の造形。2人が避難所の建物、1人がそこへ逃げ込む人。この造形を使ったゲーム／地震が起こった場合の行動(大きな地震が起こったので慌てて

外へ飛び出したなど)をグループにわかれて表現。その行動が正しいかどうかを皆で考える。その後、防災担当者が解説／フィードバック

#### 1月15日(日)〈誰でも参加OK回〉

参加者 44名(ベトナム18名、ギニア2名、フィリピン4名、カナダ1名、インドネシア2名、ブラジル3名、ミャンマー3名、日本11名)

円になってグーパーまわし、クラブまわし、大きさが変わる石まわし／自己紹介／四方に架空の壁をつくって、その中で自由に歩く、あいさつする、指定された人数のグループをつくる／「だるまさんが転んだ」のルールを使って、グループで造形あそび／50音カードを1枚ずつ胸に貼り、その文字を身体で表現、何人か集まって言葉をつくる。その言葉を表現する／グループにわかれて出されたお題(海の中、誕生パーティ、ワールドカップ、ジャングル)を静止画で表現／フィードバック

#### 3月12日(日)

内容検討中



## 外国人の暮らしにかかわる人を巻き込み、 交流から共生へ

兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアターに附属する兵庫県立ピッコロ劇団は、兵庫県小野市のNPO法人小野市国際交流協会とのタッグで、日本での生活になじめない外国人やその家族を対象に、「やさしい日本語」を使ったゲームや表現を楽しむワークショップ（以下、WS）に取り組んでいる。回を重ねるにつれさまざまな人を巻き込み、「防災」など外国人にとって重要なテーマを盛り込んだりもしている。協会の藤田聖子事務局長、河嶋栄里子副理事長、ピッコロ劇団から劇団部長の田窪哲旨さん、講師の本田千恵子さんに聞いた。

「外国人が孤立している、せっかく小野市を選んできたのに——」。『にほんごであそぼう』の協会側の窓口である河嶋さんはそんな思いを抱いていた。しかし「地域課題に劇団と取り組んでみては」の提案にはずいぶん悩んだようだ。

「最初はどんなことをやるのか想像ができず、協会内でも断った方が、という意見も出ていました。頭に触れてはいけないなど宗教や習慣の違いも気になりました。でも事業が始まってから目が開かされて。外国人同士、外国人と地域の方々の関係が広がり、小野市が多文化共生社会に向けて大きく成長したと思っています」（河嶋さん）

小野市は人口5万弱、工業団地などで働く外国人は1000人以上にのぼり、うち半分がベトナム人だ。彼らの多くは職場とスーパーと自宅

の行き来だけで、日本語教室に来てほしい人が来てくれない、日本語を覚えても日本人との交流が広がらないなどの課題があった。

一方、ピッコロ劇団は学校や企業、地域でのWSの実績は十二分にあったが、外国人を対象にするのは初めてだった。

講師陣のリーダー、本田さん曰く「何をしたらいいか考えるために、どんな問題があって、困っていることは何か、たくさん情報が欲しくて何度も何度もミーティングをさせていただきました。ゴミの捨て方、騒音、地域の人の勘違いに至るまで細かく伺う中で、WSを安心して集まれる場所にするのが第一だと思ったんです。外国人の皆さんが出会う数少ない日本人がピッコロの劇団員かもしれない、まずは日本人として向き合うべき」との思いで1年目を駆け抜けた。WSを終えた後、さっそく参加者同士がLINEを交換したり、日常的にも交流する様子が見られた。

「小野に来て友達もおらず家にこもっていた親子がWSに来てくれて、お子さんが感情を爆発させて走り回る姿がすごく印象に残っている」とは藤田さんの言葉だ。

改めて「安心できる場」とは具体的にどういうことだろう。本田さんは続ける。

「ピッコロ劇団単独のWSにならないように、協会と連携していることを伝えるようにしました。そして参加者の皆さんにお声がけするように意識しています。始まる前も休憩中もめちゃくちゃしゃべって（笑）。WS当日は開始の2時



間前には集まって、協会の方に、参加者お一人お一人の性格や日本語の習熟度、背景などを説明してもらいます。もちろん終わった後も全員で感想など振り返りをします。この情報共有がすごく大事で、だからこそ次の展開も一緒に考えられるのです」（本田さん）

コーディネーターの田窪さんが補足する。「WSの3、4倍も時間をかけて打ち合わせするケースはほかにありません。熱意がある仲間だからこそ、年々向上心を持ってステップアップできている」

懸念された宗教や習慣の違いなども、注意すべき点として教わっていたが、「難しいこと、できないことは遠慮なく教えてください」と参加者に委ね、日本人の勝手な思い込みで行動しないことを心がけている。

### いたるところにある課題を、 WSを通して共有する

2年目以降、コロナ禍で開催できない年もあったが、多彩な課題に取り組んでいる。昨今の全国的な技能実習生問題に鑑み企業単位で日本人と外国人が仲良くなる、地域の中での思い込みや誤解の解消、母国では成績優秀だったお子さんが日本語がわからないためにひきこもっているなどの課題のため、日本人も巻き込んで交流を図っていった。

「そのつどテーマごと柔軟にWSの手法やプログラムを考えました。今年度は防災、地震に特化した回をつくりました。防災センターの方も

何度も何度も打ち合わせをしてくださり、そこから、こういうときはどうしたらいいかという〇×クイズ、避難所のピクトグラムを覚えてもらうために身体でピクトグラムを表現するゲームをやりました。ベトナム人が大勢暮らしている地域の民生委員の方にも参加してもらいました。またその回は日本語教室の指導ボランティアさんの参加も多く、率先して楽しんでくださったのも安心につながったと思うんです」（本田さん）

「河嶋さんはじめ協会の方々が外国人に参加へのお声がけをしてくださっているのをはじめ、日常の暮らしに関与する方をいい具合に巻き込んでくれて、その方々が土曜開催にもかかわらず積極的に参加してくれる。本当に共生社会を目指そうとしてくれている」（田窪さん）。外国人の中にもWSに協力してくれる人材が育ってきた。

こうした流れが、市役所も巻き込み注目を集めている。困りごとの担当部署はどこなのか、外国人がアクセスしやすい環境もつくっている。

「課題はいたるところにあるんです。市役所の外国人にかかわる部署が集まる会議でWSのことを紹介するだけでなく、担当課で伝えたいこともテーマ化できますよとお話ししたら、皆さんうなづいて、理解してくださっているようです」（藤田さん）

取材の中でもこんなことをやりたいというアイデアがいくつも飛び出していた。

### ベトナム人女性参加者 レーティフォンさんの感想

「にほんごであそぼう」は、日本語で遊ぶだけじゃなくて、いろんな友達、いろんな国の人と出会えるところが魅力です。大人から子どもまで、子どもに戻って一緒にいろんなゲームを楽しんで、大笑いできました。5歳の娘もすごく喜んでずっと笑顔でした。だるまさんがころんだ、無形の壁……のゲームは子どもも覚えて、毎回楽しかったです。小野市で子どもを頑張って育てている友達もできて、生活も楽しくなります。

### 小野市人権教育研究協議会 養父雄一会長の感想

スタートライン。「馬には乗ってみよ人には添うてみよ」という慣用句があります。「何事も直接自分で体験してみよう」という意味です。外国人の理解においても同じ。言葉も習慣も違うからこそ「添う」ことが重要。でも、やはり何かアイテムが欲しい。語学力はなくても、相手を知ろうとする気持ち、笑顔、写真、互いの国の遊びや食文化の紹介など。今回体験したワークショップも重要なアイテムの一つ。そして、これが、お互いの理解のスタートライン。

## にほんごであそぼう in 加東市

北播磨地域の東部に位置する加東市は、兵庫教育大学の留学生や、加東市で働く外国人が増加傾向にある。多くの外国人が地域コミュニティに参加できていないために、日常生活上の問題に加え、災害時の避難や物資供給といった緊急情報の共有が十分にできていないという課題があった。

小野市での「にほんごであそぼう」の実績もあり、ぜひ加東市でも実施を、と令和2年度から「やってみようプロジェクト」の一環としての実施を目指してきたが、2年度、3年度ともに新型コロナウイルス感染拡大によって中止となった。

令和4年度は、もともと8/28(日)・9/4(日)に実施を予定していたが、北播磨地域で新型コロナウイルス感染症数が増加したため延期、12/11(日)の1日のみとなったものの、外国人22名、日本人8名の参加を得て、ついに実施することができた。この日は簡単なやさしい日本語を使っ



た参加者同士のコミュニケーションを楽しむプログラムを実施し、最初は後ろで恥ずかっていた外国人も、プログラムが進むにつれて、前にでてきて笑顔でゲームに参加するなど、外国人にも日本人にも、初めての演劇ワークショップを大いに楽しんでもらうことができた。

NPO法人加東市国際交流協会、加東市役所、ピッコロ劇団による事前打ち合わせから当日運営、振り返りまでの協働体制も順調に滑り出した。今後のステップアップが楽しみである。



## 坊っちゃん劇場 [愛媛県]

【実施企画】

### 演劇教育を活用した 就労教育支援ワークショップ

社会参加や職業自立に必要な表現力・集中力・想像力、コミュニティ形成を演劇スキルを活用したり、楽器や声を使って自己表現をするワークショップ。

【協働団体】愛媛県立宇和特別支援学校

【地域活動団体】愛媛ミュージック・ケア研究会

【実施回数】全6回

【講師】

愛媛ミュージック・ケア研究会 坊っちゃん劇場

【サポートメンバー】

東温市地域おこし協力隊



樋口裕子



中村茂昭



田中直樹

【実施企画】

### がん患者と看護師に対する 新しい医療コミュニケーション技法の検討

がん患者と向き合う看護師を対象に、シミュレーション演劇をとおしてコミュニケーションの課題解決を図るプログラム。

【協働団体】

独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター看護部、愛媛県医師会、愛媛県議会がん対策推進議員連盟、東温アートヴィレッジセンター

【実施回数】全10回 ※コロナ禍のために実施できず

【講師】中村茂昭 脇山尚美 斎藤かおる

【コーディネーター】金村俊治

## 演劇教育を活用した就労教育支援ワークショップ



### プロジェクトの経緯

愛媛県立宇和特別支援学校は、県内4つの支援学校の一つで、宇和島市の隣の西予市にあり、知的、聴覚、肢体不自由といった障害のある児童・生徒が通っている。学校側と会議を重ねる中で、全国では障害のある子どもたちが、自分が目標とする職業に就くためのスキルを向上させる職業教育に重点を置いたカリキュラムの編成が進んでいるが、県内では遅れており、卒業後の社会参加や職業自立に向けた多様な教育ニーズを満たせていない現状があることがわかった。そこで高校部の子どもたちが社会の一員として活躍できるように、一人ひとりの潜在能力を引き出し、就職への意識や自己肯定感の向上を図るワークショップを検討した。しかしながら高等部のカリキュラムが多忙で、時間を割くのが難しかったため、まずは学校の雰囲気を知ることから始めるプランに切り替え、対象も中等部とすることにした。中等部の生徒は、対外的なコミュニケーションに課題があり、またワークショップの経験もないため、どういったことができるのかを探るようなところから始めてほしいという要望があった。

### 劇団の視点

坊っちゃん劇場では、企業や学校、地域で演劇の手法を使ったワークショップを実施してきている。宇和特別支援学校では初年度の目標を、中等部の生徒が、自分の声や表現によって自信をつけ、自己肯定感やコミュニケーション力の向上につなげられるプログラムを検討した。

しかし演劇に触れたことがない生徒も多く、いきなり心を開いてもらうことは難しいと考え、愛媛ミュージック・ケア研究会の樋口裕子先生とタッグを組み、お互いを知り、垣根をなくすワークを実施することにした。ミュージック・ケア\*は加賀谷哲郎（日本音楽療法協会を設立・1983年没）が創案した集団音楽療法のメソッドを基本に、その方法と理論を宮本啓子と日本ミュージック・ケア協会が体系化したものです。また、その主なメソッドは、心身の発達に必要な情緒の安定や、身体的機能の維持改善、発話などのための刺激や動作に応じて作曲された、オリジナルな音楽を使用しているところに特徴があります（宮本啓子著「ミュージック・ケア その基本と実際」川島書店より）。両者の手法を融合させ、また現場のさまざまな状況に柔軟に対応できる可能性を持ったアプローチをしようと考えた。そして各学年2日間ずつ体験してもらうことにした。

\*「ミュージック・ケア」という言葉は、日本ミュージック・ケア協会の商標登録です。

### 実施内容

令和4年

9月21日(水)

参加者16名(中学部1年生12名 教員4名)

準備運動、ストレッチ／発声体操、音楽やリズムと共に発声する／(ダンス的要素)／役者訓練ゲーム／普段練習している歌の発表

※全体企画の初回でもあり、演劇的スキルとミュージック・ケアの手法がどうはまるのか様子を見た。また生徒たちの集中力にも注目した。

9月28日(水)

参加者16名(中学部1年生12名 教員4名)

アップ(ゴキブリ体操、ストレッチ)／自分の音を出してみる(一人ずつ確認)／指示ゲーム(目で通じ合う→宜しくね)／役者訓練ゲーム／あなたゲーム

※演劇スキルを用いて、どこまでそれぞれの表現ができるかのチャレンジをした。

10月5日(水)

参加者27名(中学部2年生19名 教員8名)

ストレッチ／発声(それぞれの声を響かせるよう)／音楽に合わせて、動きや楽器で表現してみよう。／歌より→幸せなら手をたたこう／役者訓練ゲーム／♪「元気に元気にゆっくりゆっくり」(ミュージック・ケアオリジナル曲)

※2年生は最初で最後のワークショップということで、第1回(9/21)の内容を踏まえて、ブラッシュアップした。

11月30日(水)

参加者23名(中学3年生15名、教員8名)

講師がどんな人間か知ってもらおう。／生徒のみんなも自己紹介。／ストレッチ／発声それぞれの声を響かせる／音楽に合わせて、動きや楽器で表現してみる／普段練習している歌を歌う／役者訓練ゲーム／体を動かして

※内容を組み替えながら、まずお互いの自己紹介を行い、内容の理解を深めながら進めた。それぞれの声帯の音を聞くことで、自分にしか出せない音を見つけるチャレンジをした。

12月7日(水)

参加者23名(中学3年生15名、教員8名)

ストレッチ(寝転がって、座って)／発声(皆の声を響かせよう)猫、犬、ネズミ、牛、ライオン、馬 など／指示ゲーム、役者訓練ゲーム／音楽と共に、動きや楽器で表現してみよう／台本を使って表現してみよう。『プレゼントは何?』

※イメージして表現したり、声に出してみたり、台本を使用してみたり、数パターンのチャレンジを行った。

## 自然反応の音楽と即時反応の演劇を掛け算したワークショップの可能性を探る

坊っちゃん劇場にはアウトリーチ部門があり、「表現するから＝生きるから」を掲げ公演やイベント、ワークショップ(以下、WS)、特別支援学校でのミュージカル制作など多岐にわたる活動を展開している。同部門に所属する俳優・中村茂昭さんが、日本ミュージック・ケア協会の会員で愛媛を拠点に活動する樋口裕子さんとタッグを組み、新たなWSの開発に挑んだ。コロナ禍で紆余曲折あった末に、協力団体に手を挙げたのは愛媛県立宇和特別支援学校だ。

中村さんはかつて、樋口さんが行うミュージック・ケアのセッション(いわゆるWS)を見学し、参加者を惹きつける力量に圧倒された。「懐の深さが半端じゃない。幼いお子さん、知的や身体障害のある子がいらっしゃったんですけど、みんなで音楽をつくっていく。一体感というより、想像力の中にみんなが包まれているようで、僕の目標になり、演劇と融合させたいと思ったわけです」(中村さん)

ミュージック・ケアは、音楽の特性を生かして、赤ちゃんから高齢者、障害の有無などに関係なく対象者の心身に快い刺激を与え、対人的な関係の質を向上させ、情緒の回復や安定を図るという取り組み。樋口さんは「加賀谷式集団音楽療法」と呼ばれていた時代から30年近く

これに携わっている。「以前は特別支援学級の教員をやっており、障害児教育にかかわっていました。この音楽療法を学び始めたのは、障害のある子の心を開き迎え入れるためでした。音楽を使って、声を出したり、体を動かしたり、みんなで合奏をしたりしながら心を開いてもらうのです。音楽が言葉の変わりをしてくれるんですね」(樋口さん)

中村さんの依頼にも「宇和特さんとのコラボに私が役に立つなら」と快く参加してくれた。実は教員時代に、教え子を連れて宇和特別支援学校に体験入学などでよく訪れていた。学校の様子などを知っていることも、中村さんにとっては頼もしい存在だった。

中村さんには、かつて5年計画で、愛媛県内の特別支援学校4校それぞれとミュージカルをつくる事業を行ったときに「学校カリキュラムとともに企画を運営するため、先生方の負担が過多になる」という課題が残った。そこで「作品をいきなりつくるのではなく、子どもたちと丁寧にかかわりながら、そしていろいろな人にかかわっていただきながら共創するWSをつくりたい」という考えがあった。

愛媛県立宇和特別支援学校も創作を行った学校の一つ。今回は古窪仁美先生が担当する知的障害部門の中学部46人の生徒とWSを行った。「我々として大きな目標は持っていませんで



した。子どもたちが主体的に、楽しく、積極的になっていく姿を見られるといいなと」(古窪先生)

### ミュージック・ケアの懐の深さに学ぶ

WSはメニューを検討し、中村さんと樋口さんがパート分けし、現場での感覚を大切に進めていくこととした。

樋口 私へのオーダーは、「WSを体験するのが初めての生徒さんたちなので、アイスブレイクを」とのことでした。ただ先生たちが不安や負担なく参加してもらわないといけません。歌一つとっても、授業でどんな曲を練習しているか、鑑賞曲には何を取り入れているか事前に詳しく聞き取りしました。なじみのある曲をWSで使うことは日常と地続きになり、生徒さんが安心して参加できる。ほかにも聴覚過敏の生徒さんがいないかを伺いました。

中村 普段は私たちのミュージカルを見ていただいた後にWSという流れです。でも今回はあえて生徒さんたちにとって「この人たちだれ？」という状態から始めました。最初は1年生。言葉だけで自己紹介し、樋口先生にボタンタッチして音楽を聴きながら、体を動かしたり、リズムを取ったり。その際の集中力の差がずいぶんありました。どうしたら導入でもっ

と惹きつけられるか、(私の方に)重要なファクターが必要だと感じました。1年生の2回目からは樋口先生に冒頭をお願いして、みんなの気持ちがちらに向いたところで、WSを始めたのですが、子どもたちの集中力が高いまま進めることができました。

樋口 私は中村さんのWSが初めてなので、初回はどんなカードをお持ちなのか見せてもらって。中村さんの動物や石になってみようというゲームのときに、ミュージック・ケアのオリジナル曲が動きに合うと思って選曲したりしたのですが、お互いが表現したいことの補い合いを行った感じです。

中村 1年生のWSで間違っていないという手応えを得て、2年生は1回でしたが1年生での反省を含めての挑戦でした。3年生のときには1、2年生の1回目の課題を踏まえて実施したら、反応がすごく良かった。おかげで2回目はより挑戦ができました。そんなふうには生徒さんたちに合わせ内容を変え、反応を感じながらの実施でした。またそのつど古窪先生を通して担任の先生からも意見をもらって、共有し、修正しながら5回を終えました。

樋口 ミュージック・ケアは自然反応。やりたくなるまで待つし、嫌なら参加しなくてもいい。一方、演劇は即時反応ですよね。両極端ですが、お互いが歩み寄りつつ、どうしたら生徒さんが

### 東温市地域おこし協力隊 田中直樹さんの感想

重度軽度を含めて多様な障害をもつ子どもたちに、いつか同じ形式のワークショップを実施することはなかなか困難な取り組みであるように感じる。しかし個々人で別々の達成レベルの基準をあてることで、従来の一貫した評価基準でのワークショップでは、生まれなかった多彩な個性が発見できた。今後は個々人のレベルを見分ける精度を上げて、より質の高いワークショップを展開できると良いと考える。

### 舞踊/振付家(宇和島在住) 後藤未芳子さんの感想

芸術を通して楽しみを引き出すことや、「できた」「できる」の積み重ねをすることで、達成感を味わっていくのは、意欲の向上につながると思います。さまざまなアプローチからワクワクの入り口を開けていくことで、重度・軽度問わずにそれぞれの方の可能性の扉を開ききっかけになるのでは、と思います。

表現してくれるか探るようなWSでした。

こうした試行錯誤のWSについて古窪先生はこう感想を述べる

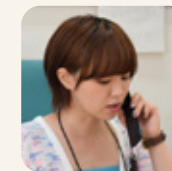
「普段ならパニックになる子がずっとそこにいてくれたり、一人ひとりの中には変化が見られたと思います。その中で、一人の男の子のすごく光った一面を見ることができました。普段は人前で話すことが苦手で、障害特性で落ち着きがないのですが、WSではとっても積極的でした。演劇をやりたいと何度も言っていました。実際にお話を聞くにも一番前に座ったり、台本を手には得意げにセリフをしゃべったり。職員一

同びっくりしましたし、うれしかったですね。来年度が楽しみになりました。ただ最終的な目標が見えなかったという意見もありました。校内での発表などを目的にやってもいいかもしれません」

来年度のWSも引き受けてくれるという先生の言葉に中村さんも頷く。

「生徒さんたちがより自分を表現し、意思表示によって交流ができて、自分の存在価値を感じてもらえたら。その先に学校の目標でもある、就職しても思っていることを言えるようになる、自己肯定感を高めるところを目指したい」(中村さん)

「やってみようプロジェクト」では今年度、各講師・コーディネーターが、各地の実施現場に参加し、互いのプログラムを体感する機会を設けました。講師のスキルアップ、また協働団体・地域連携などの情報共有によりコーディネーターの人材育成を目的としています。



ピッコロ劇団×小野市国際交流協会×エクラ  
「にほんごであそぼう」在日外国人対象ワークショップ

喜舎場 梓 (TEAM SPOT JUMBLE)

ピッコロ劇団×小野市国際交流協会×エクラの3団体が、5年間積み重ねてきたからこそその信頼関係を築いており、想いや目標にズレがなく、常に参加者のことを考えているのを感じた。地元の高校生も参加し、地域の学校の先生も協力的であり、まさに産学官民の理想的な現場だった。私も参加者の一人として体験させてもらうことで、参加者の様子がよくわかった。また内容も、当事者としての気持ちを理解しやすかったように思う。

このワークショップが災害対策などを伝える情報共有の場になった。演劇ワークショップという「顔見知りになる→情報が入る」場を提供することが、在日外国人の皆さんの日本での暮らしやすさにつながると感じた。

その一方、外国人を対象にワークショップを実施する場合、宗教的なNGがないか、身体に気を使わなくてはならない妊婦がいないかなど、普段のワークショップとは異なる注意点があることを知った。事前に参加者のこ

とを知ることは重要である。どのような対象者がいるか把握し、どれだけ障害を取り除いて安全な場を提供できるかを念頭に置いて、今後も計画・実施できるよう注意したい。

プログラムにはチーフ講師の本田千恵子さんが担当する部分とアシスタントの方が担当する部分があった。アシスタントに任せる時間には、本田さんが、参加者の様子を俯瞰して見ることもできるようだった。

コーディネーターの田窪さんの立ち位置、協力団体とのかかわり方からも学ぶことが多かった。小野市国際交流協会の方々との連携はもちろん、ファシリテーターに信頼を寄せ、見守り、参加者が困っている様子などあれば声をかけ、要所所でサポートする姿が印象的だった。どのように関係を築いていったのかなど、今後の交流でぜひうかがいたい。

## がん患者と看護師に対する 新しい医療コミュニケーション技法の検討

※コロナ禍のために実施できず

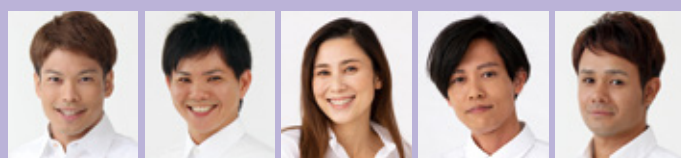
「高齢社会白書」によると、2020年を起点に、2030年までの10年間でがんによる死亡者が約30万人増加すると見込まれている。しかし病床数は増えることはなく、看取り場所の確保が困難になると想定されている。そのため、人生の最終段階を迎えた人を、各地域で支えられる体制、すなわち地域包括ケアシステムの構築が課題となっている。この課題に看護師はどのような役割があるかを考え、行動することを求められる。そのためには、がん患者と家族、医師や看護師との良好な関係性の確立、多様な医療コミュニケーションスキルが必要

と考えられる。一方で、院内ではコミュニケーションが減少し、職員間の相互理解が希薄になりつつある。またハラスメントなども含め中途退職者が増えることで、職務遂行が困難になっている一面もある。そのため自分を客観視し、お互いを理解しあえる機会を増やすなど、職場環境整備が必要だと考えた。演劇の手法を使ったワークショップを体験することで、交流の機会が増えるとともに自分を客観視し、お互いを理解することにつながるのではないかという期待があった。

四国がんセンター名誉院長・谷水正人氏



## TEAM SPOT JUMBLE [沖縄県]



島袋寛之 与那嶺圭一 ナツコ 蔵元利貴 比嘉恭平

劇団 Theater TEN Company FEC フリー



大山瑠紗 玉那覇真樹 ただのあきのり 垣花拓俊

【実施企画】

## 障害者にもわかる ヘルスリテラシーワークショップ

大学生、施設職員とともに、知的障害を持つ方々にもわかる視覚的イメージから理解を促す作品を創作・上演し、健康管理の必要性を届けるワークショップ。

【協働団体】

公立大学法人名城大学、障害者支援施設 海陽園、在宅支援センター ゆいとぴあ、生活介護事業所 かふうや

【実施回数】全8回

【講師】島袋寛之

【サブ講師】与那嶺圭一、ナツコ、蔵元利貴、比嘉恭平、大山瑠紗(劇団 Theater TEN Company)

【実施企画】

## コミュニケーションワークショップ

児童デイサービスや特別支援クラスの児童を対象に、自由に表現することの楽しさや達成感が得られるプログラムのワークショップ。

【協働団体】

社団法人スマイリーはうす、社会福祉法人ひんぶん会(児童養護施設なごみ)、公立大学法人名城大学、沖縄市立比屋根小学校、沖縄市立諸見小学校、沖縄市立宮里中学校

【実施回数】全6回

【講師】島袋寛之、与那嶺圭一・蔵元利貴

【サブ講師】ナツコ、比嘉恭平、大山瑠紗(劇団 Theater TEN Company)、玉那覇真樹(劇団 Theater TEN Company)、垣花拓俊(フリー)

【実施企画】

## 医療的ケアを要する在宅療養児とその家族の災害時の 共助のあり方について考える演劇ワークショップ

災害時避難所における在宅療養児とその家族への支援について、地域住民、福祉科の高校生、看護学生とともに演劇ワークショップを通して疑似体験し、共助のあり方を体感する。

【協働団体】公立大学法人名城大学、若狭公民館、沖縄県立中部農林高校福祉科

【実施回数】全3回

【講師】島袋寛之

【サブ講師】与那嶺圭一、ナツコ、蔵元利貴、比嘉恭平、玉那覇真樹(劇団 Theater TEN Company)、ただのあきのり(FEC)

【コーディネーター】喜舎場 梓

## TEAM SPOT JUMBLE

### 障害者にもわかるヘルスリテラシーワークショップ



#### プロジェクトの経緯

2019年、アルコール摂取量について健康教育が学べる演劇を創作したいと名桜大学の島袋尚美准教授より依頼を受けた。アルコール摂取による健康被害が多い離島にて、地域住民や保健師とともに演劇を創作。集団健診が行われる会場で披露し、節度ある適度な飲酒を呼びかけた。この経験から、ヘルスリテラシーが行き届かない分野へ目を向け、演劇ワークショップを実施したいと2021年に相談を受ける。また、学生自らが地域社会に根差した課題・問題を解決していく中で、生活設計に必要な主体性、創造性、計画性を習得することを目指せるよう、プロジェクト学習に組み込むこととなった。今年度も支援施設で生活する障害者のヘルスリテラシー向上教育に焦点をあて、健康に対する意識を高め、予防行動がとれるよう、楽しくわかりやすく学ぶことができる演劇を活用した健康教育を実践する。以前、弊社がワークショップを実施したことのある障害者支援施設 海陽園へ協力を依頼。グループ施設の在宅支援センター ゆいとびあ、生活介護事業所 かふうやの利用者に向け、ヘルスリテラシー演劇を大学生が披露することとなった。福祉施設、劇団、大学の産学官民が連携協働するプロジェクトである。

#### 本部海陽園 知念秀吉施設長の感想

学生の皆さんが利用者さんに演劇を通して健康について理解してほしいという思いは、しっかり伝わっていました。そして学生の皆さんが福祉、障害者について少しでも興味を持ち、考える機会となったのなら幸いです。健常者、障害者が混在する社会の中で弱い立場の人を社会全体として支える仕組みや共に生きやすい地域づくりが大切だと思います。

#### 劇団の視点

以前、県内高校の福祉科とともにプログラムをつくり、障害者支援施設 海陽園で高校生がファミリーテーターとなってワークショップを実施した。高校生と施設利用者が交流することで、生徒は障害福祉について理解を深めることができ、施設利用者はレクリエーションを楽しんだ。今年度はその経験をもとに、ヘルスリテラシーの向上を目指した交流会を提案。新型コロナウイルス感染症の感染流行の状況を鑑み、施設利用者との接点を極力減らし、大学生が創作した健康教育演劇の鑑賞会を持つこととなった。演劇を創作する前に、各施設の支援員や看護師をお呼びし、障害福祉について学ぶ場を設けた。障害の度合いや理解力、実際に健康管理について悩んでいることなど実例を交えて知り、演劇創作に生かす。また、創作の途中経過を支援員に見てもらい、直接アドバイスをもらうことができた。「運動の大切さ」「バランスの良い食事」「生活習慣を見直そう」をテーマに3グループにわかれて創作。それぞれに講師が入り、より伝わりやすい方法について模索した。本番終了後、普段施設でも準備運動として行われている体操を、大学生が披露。舞台上から声をかけると、観客席から立ち上がり、利用者も一緒になって体操することができた。



#### 実施内容

令和4年

10月1日(土) 参加人数18名

アイスブレイク(じゃんけんゲーム) / ジェスチャーゲーム体験 / 発表と講評 / 振り返り

10月22日(土) 参加人数20名

アイスブレイク(1~30ゲーム) / 話し合い(施設支援員の方々からヒアリング) / 創作(施設利用者・障害者に向けた健康教育演劇を創作) / 発表と講評 / 振り返り

11月5日(土) 参加人数25名

アイスブレイク(ステップインフォワード) / 創作(施設利用者・障害者に向けた健康教育演劇を創作) / 発表と講評 / 振り返り

11月19日(土) 参加人数23名

創作(施設利用者・障害者に向けた健康教育演劇を創作) / 発表と講評 / 施設支援員の方々からのアドバイス / 振り返り

11月26日(土) 参加人数11名

アイスブレイク(ステップインフォワード) / 体操の確認(立ち位置と出掛け確認) / 小道具製作 / 創作(施設利用者・障害者に向けた健康教育演劇を創作) / 発表と講評 / 振り返り

12月2日(金) 参加人数10名

アイスブレイク(20ゲーム) / 体操の確認(立ち位置と出掛け確認) / 小道具製作 / 創作(施設利用者・障害者に向けた健康教育演劇を創作) / 発表と講評 / 振り返り

12月16日(金) 参加人数27名

体操の確認(立ち位置と出掛け確認) / 創作(施設利用者・障害者に向けた健康教育演劇を創作) / 場当たり / リハーサル / 振り返り

12月17日(土) 参加人数27名

確認 / リハーサル / 発表 / 振り返り

### 演劇は多様なスキルを身につけられるリベラルアーツ教育

名桜大学学長・砂川昌範

日本で演劇を大学教育に取り入れている例はまだまだ少ない。名桜大学はリベラルアーツ教育の一環として、学生が主体的に地域の課題に向き合い、その解決に取り組むことを通じて実践的な学びを深める科目である「プロジェクト学習」を設けている。障害者支援施設本部

海陽園、劇団TSJと名桜大学との連携協働でヘルスリテラシー向上に演劇を用いたアイデアは大変素晴らしい。演劇は、コミュニケーション能力、表現力、チームワーク、自己表現など、多くのスキルを身につけることができるリベラルアーツ教育だ。今後の発展が楽しみである。

## 演劇を通じて課題を視覚的に伝えることで、 より記憶に残るものになる

「障害者にもわかるヘルスリテラシーワークショップ」は、知的障害を持つ方々を対象に、健康管理の重要性を視覚的、かつ体験的に届ける試み。2021年度に名桜大学の学生たちの自主的な学びの場「プロジェクト学習」としてスタートし、障害者の生活介護支援を行なう本部海陽園の協力を得て、健康教育演劇の創作と発表の場を設けている。およそ2カ月半の準備期間で学生たちは何を学ぶのか。受け入れ施設のスタッフが得た手応えとは？ 名桜大学人間健康学部の島袋尚美先生、ファシリテーターを務めたTEAM SPOT JUMBLE (TSJ) の島袋寛之さん、同劇団の制作でコーディネーターの喜舎場梓さん、本部海陽園の支援員・玉代勢卓さんに、事業のあゆみと手応えを聞いた。

### 「使える」演劇づくり

健康教育を通じた地域貢献のあり方を探る島袋先生と、大学のある名護市で子どものためのワークショップを手がけていたTSJが初タッグを組んだのは、2019年のこと。「長野県で演劇を使った、糖尿病についての演劇教育が行われていることを知り、名護市役所にTSJさんを紹介してもらい、学生と教員、地域の保健師さんたちと『こんなお酒の飲み方は嫌だ』という短い劇をつくって、地元の方々に観てもらったのが始まりです。この時、最初はあまり創作に

積極的でなかった人たちも、やっていくうちに「ああしよう、こうしよう」とアイデアを出しながら場面を組み立ていく様子を見て、「これは使える」と思いました。言葉や文字で伝えるだけでなく、演劇で擬似体験してもらうことで、より記憶に残るものになる、そんな可能性も感じました」(島袋先生)

2021年度からスタートした本事業の目的は、学生たちとともに、福祉施設の利用者のヘルスリテラシーの向上に取り組むこと。たとえばコロナ禍以後一般的になった「なぜ外出するのにマスクが必要なのか」といった情報も、障害を持つ人たちに、本当に理解し、納得して行動してもらうまでには、時間や労力を要することが多い。WSでは、まず、施設の見学や利用者との交流、支援員からのヒアリングを行った後、具体的な創作に取り掛かった。「プロジェクト学習には看護学科以外の学生も参加しています。障害者の方にどう接していいかわからないというような戸惑いもありますから、実際の施設利用者の方々の訓練の様子や生活ぶりを知り、交流することで理解を深めていく時間は必要だなと思います」(島袋先生)

作品創作は「バランスのよい食事」「運動の大切さ」「生活習慣を見直そう」という3つのテーマごとにグループにわかれて進められた。「どのグループも創作自体は早く進んでいきましたから、そのぶん、セリフじゃなく体の動きで

#### 参加した学生の感想①

海陽園の利用者さん方が、こちらの声掛けに近い形のセリフに対して、返答をするような様子が見られ、作成した演劇が自分たちの生活に関係しているということを感じ取ってくれたのではないかと感じる事ができた。また、演劇製作を完遂するという事は、とても達成感を得られることであり、仲間意識と連帯感が醸成される取り組みであるということを感じることができた。



伝える方法、より視覚的に見せるにはどうしたらいいか、たとえば小道具を大きくしてみるといった工夫ができました。その過程では、なるべく学生たちの意見を尊重するようにしています。また今回は島袋先生をはじめ、看護の先生方から、移乗や、松葉杖や車椅子の使い方について「看護的にはこうだよ」というアドバイスをいただくこともできました。支援員の方々にもお越しいただき、現場で起きていることを教えてもらったり、できた作品が理解できるかどうか観ていただいたりして、まさに産学民の連携を通じて丁寧な作品づくりができたと思います」(TSJ島袋さん)

### 学生も利用者も支援員も変わる

迎えた発表の日。目を引く大きな注射器などの工夫の甲斐もあり、会場からはドッと笑い声が上がると、たしかに手応えを得られたという。発表後には学生たちが(施設内では定番だという)「ピカレンジャー体操」を披露、利用者にも声をかけ、一緒に身体を動かす一幕もあった。「最初は演劇なんてやれるのかなという感じだった学生も、利用者さんたちの盛り上がりも目の当たりにして、「もう終わっちゃうんですね」なんて言っていて。すごくいい経験になったと思います」(島袋先生)。「外部の方と交流することは、利用者だけでなく、職員の内

#### 参加した学生の感想②

不安な気持ちと同時に「健康について私の演技を見て考えてもらいたい」「伝えられたらうれしい」という気持ちもあった。本番は数少ない練習の中でも一番うまくできたと思う。これは、TSJさんやチームの子とポジティブな言葉を掛け合え、いいものをつくろうと一つになれたからであると思う。演じていて、対象者の方が興味を持って見て、声を出して笑ってくれるのを聞いたことが、「伝わってる！」という実感になり、非常にうれしかった。

識を変える効果も持っています。特に今回は僕以外の職員にも演劇を観てもらったことで、利用者さんへの声掛けの仕方が変わったと思います。どうやって言葉で伝えるか頭を悩ませていたことも、劇を通じて視覚的に伝えてもらえたと、僕らも「あの劇で観たよね」とか、「自分も、あの劇の人みたいに運動してないんだけど」なんて、アドバイスの仕方が変わってきました」(玉代勢さん)

継続している枠組みだからこそ、見つけた目標や課題もある。「僕はもっとレベルアップした作品もできるんじゃないかなと感じています。三線を弾ける学生がいれば、演奏しながら体操をするとか、体操自体もオリジナルなものをつくったりもできそうです」(TSJ島袋さん)。「利用者さんを楽しませること、支援員の引き出しを増やすことはもちろん、こういう活動をもっと発信していくことで、海陽園っていい施設だなんて思われるようにしたいし、それが次世代の人材を育てることもつながると思います」(玉代勢さん)。「発表の場などではTSJさん素晴らしかったですと言っていたとしても、振り返りの回や打ち合わせの中で、ポロポロと課題が出てくることも多いんです。ですから、自分たちのやっていることを素晴らしいと思ひ込みすぎず、問題は必ず起こることを前提に、これからも丁寧なコミュニケーションを重ねていきたいと考えています」(喜舎場さん)



## コミュニケーションワークショップ

児童デイサービスや特別支援クラスでは、発達、知的障害を持つお子さんが在籍しており、他者が話していることを理解できず、硬直し、パニックを起こす場合もある。また、情報処理が苦手なお子さんに対して、指導員や先生方は指導・伝達方法に苦労していた。

今年度は先生方・支援員と相談し、①人の話を聞く、②やさしく伝える、③ケガに気をつける、④応援する気持ちで静かに見るという4つのルールを設定。トラブルの一例として『楽しくなってテンションが上



がってしまい、人にぶつかってケガをさせてしまう』というお芝居を見てもらうと、子どもたちは日常生活で思い当たる節があり、過去の経験を思い出しながら、気をつけるようになった。

## 医療的ケアを要する在宅療養児とその家族の災害時の共助のあり方について考える演劇ワークショップ

名桜大学の松下聖子教授より、災害時を想定した医療的ケア児への対応を学ぶワークショップができなかったかと相談を受けた。阪神淡路大震災を経験している教授は「在宅療養児とその家族のための災害時避難



所運営における現状と課題」を研究している。避難所には年齢や性別、障害や難病の有無など多様な立場の方が集まり、共に生活しなくてはならない。今年度は「共助」のあり方を考えることができるプログラムを教授と一緒に検討した。

避難所の環境を演劇でシミュレーションすることで、心の動きを感じ取り、自分事とすることができる。参加者が感じたことを共有し、問題の緩和・解決する方法について話し合った。

「やってみようプロジェクト」では今年度、各講師・コーディネーターが、各地の実施現場に参加し、互いのプログラムを体感する機会を設けました。講師のスキルアップ、また協働団体・地域連携などの情報共有によりコーディネーターの人材育成を目的としています。

## 劇団朋友「からだであそぼう」高齢者対象 zoom ワークショップ



わたなべのぶこ  
(一般社団法人わらび座)

zoomの中での認知症の方へのワークショップは、初めての経験でした。カードを選んで言葉を伝える最後のワークは皆さんだんだん熱が入ってきて、人生の中で出会った言葉があふれていました。ほかの人の言葉への反応も増えてきたようです。

私も高齢者へのワークショップはこれまでに経験していますが、認知症の方々へのワークを拝見したのは初めてでした。それぞれの個性を生かして、決して無理せずに向き合う西海真理さんの姿勢を学ばさせていただきました。

さまざまなジャンルを生かしながら、経験を積み重ねて、同じ人間同士として誠実に、尊敬し合って向き合っていくことは、だれに対しても共通のことだと改めて感じました。



中津原知恵  
(青年劇場)

西海真理さんが、参加者お一人おひとりに説明がちゃんと伝わっているかどうかを確認しながら進めていたことが印象的でした。当たり前のことかもしれませんが、参加者と信頼関係ができていて、画面越しでもそれが伝わる様子はとても素敵だと感じます。

身体の仕組みを理解されていることで、ゲームを通してどんな効果があるのかなどの、お話にとっても説得力がありました。なぜ行うのかを理解したファシリテーターだと依頼者も安心して任せられるのだと思いますし、ワークショップを行う演劇人にとって学びが必要だということを改めて感じました。学習する機会があったらぜひ参加したいと思います。



木之下由香  
(兵庫県立ピッコロ劇団)

今回、初めてzoomを使ったワークショップを見学しました。オンラインでも双方のコミュニケーションがちゃんと取れるのだととても感激しました。個人の発言に対しても周りの方々も反応していて一体感さえも感じられ、画面越しに見ているこちらまで元気をいただいたようで笑顔になっていました。

そして綿密に考えられたメニューも素晴らしかったです。テンポも心地よかったです。私自身、zoomでのワークショップの機会はこの先あるかどうかわかりませんが、機会をいただけたときには今回のように参加者も自分も心から楽しめる場にできたらと思いました！

西海真理さんが「高齢者の方々は『人生の大先輩』という思いがまずは大前提！」という言葉が最初に出てきたことに納得させられました。やっぱりそういう気持ちが根底にある方たちだからこそその人間力があふれていました！ やっぱり演劇も、ファシリテーターも「人」だと思います。私ももっと「人」として自分を磨いていこうと改めて思う機会になりました。



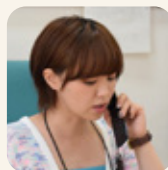
板倉 哲  
(青年劇場)

西海真理さんの「待ち方」には個性が現れていて、ゆっくり待つときと意外とせっちな印象のときがありました。ただ、これまでの関係づくりが成功しているのでしょうか、付き添いの方や参加者の皆さんがそれをよくフォローされていたと感じました。

ファシリテーターとして無理をして頑張り過ぎない風情。言い換えれば素に近い自分を大胆に出されていたことが勉強になりました。

私のワークショップではいつも分刻みのタイムテーブルを準備してから現場に臨みますが、もう少し肩の力を抜いて向き合うのもありなのかなと思いました。

オファーを受けても、その現場に本当に必要な課題を見つける作業は難しく、毎回苦労します。講師料の設定も含めた演劇ワークショップの総合的マネジメントの知恵や工夫がありましたら学びたいです。



喜舎場 梓  
(TEAM SPOT JUMBLE)

認知症のある方々に対して、少しハードルの高い「言葉遊び」をゲームに取り入れていることに驚きました。頭を使い、言い淀む場面もあったのですが、常に笑顔で参加していらっしゃり、言葉がなかなか出ないことに対しても不安がっているようには見えませんでした。以前にも体験された方が多く、ゲームに慣れていたからかもしれません。周りの支援員の方も一緒に楽しみながら、説明を復唱するなど、ゲームの進行をサポートされている姿が印象的でした。

また、ワークショップを経験したことで、服用する薬の量が減ったり、症状が抑えられたりする効果があった前例も教えていただきました。西海さんはオンラインの画面上で、参加者が疲れていないか、飽きていないか様子を見て深く見ており、プログラムを変更するなど柔軟に対応されることも勉強になりました。

※3月12日には、兵庫県立ピッコロ劇団「にほんごであそぼう」(小野市)での現場体験の第2弾を行いました。参加者は西海真理(朋友)、瀬川舞巴(わらび座)、岡本有紀(青年劇場)の3名でした。



文化庁委託事業 令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業  
やってみようプロジェクト

令和5年3月発行

発行 公益社団法人日本劇団協議会  
〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-12-30 芸能花伝舎3F  
TEL:03-5909-4600 FAX:03-5909-4666  
info@gekidankyo.or.jp

編集・執筆 今井浩一(『engawa』)  
執筆 宇田夏苗(朋友)、河野桃子(青年劇場)、鈴木理映子(TSJ)  
デザイン 柳沼博雅  
印刷 株式会社平河工業社

公益社団法人日本劇団協議会  
交流事業部：西川信廣、衛 紀生、林 隆之、公家義徳、高橋正徳、横内謙介、渡辺 弘、有馬理恵、佐藤尚子、柴田義之

